

MANGA REVIEW

神経質な描線

『少女ネム』

木崎ひろすけ

ゴト千七

亡くなったマンガ家の生前は、読者であれば誰もが幸福であったと思いたい。すでに亡くなった木崎ひろすけさんのことを思い出すと、拭い去れないが後悔の念があるのは、木崎さんの作家人生は幸福だったとはいえないということだ。

だが、大成せずに終わった多くのマンガ家と、同じように見たくはない。

雑誌「コミックビーム」で連載していた、『少女ネム』はカリブ・マーレイ(狩撫麻礼)を原作に迎えて描かれている。

『少女ネム』は主人公ネムとゴローの恋愛を描いているのか、ネムのマンガ家としての成功物語を描いているのか、その焦点が定かではない。不思議な作品である。その魅力は、その絵にあった。原作が狩撫麻礼なのに、彼の劇画くささがまったくしないマンガは『少女ネム』だけだろう。それには絵が劇画原作者のアクを抜く作用があったろう。

絵はたしかに文句が無い。続く言葉は「だが」「しかし」である。

木崎さんについては、二つの引用を引かせてもらう。ひとつは、いしかわじゅん先生の『漫画の時間』から、ひとつは『少女ネム 増補版』の巻末解説から引く。

このマンガを読みながら、誰かコマ割りと構成のわかる編集者をつけてやれよ一、と突っこみたくなってしまうくらい、効率が悪く説得力のない無駄なコマ割りや構図が多いのだ。

いしかわじゅん『漫画の時間』晶文社

正直な話、オレもいろんな漫画家を担当してきたけれども、彼はその難易度で間違いなくトップクラスだった。コミュニケーションをこれほど、取りづらい漫画家はいなかったからなあ。(引用者注・巻末解説 奥村勝彦)

木崎ひろすけ『少女ネム 増補版』エンターブレイン

この引用二つでわかるのは、いしかわ先生が編集に原因を求めていた問題のアンサーを、奥村さんが出している。

木崎さんは編集者が管理できないマンガ家なのだ。

だから、『少女ネム』の頃になっても、「このコマ割りはどうなんだろう」というものが、見受けられる。だが、彼の性格上、編集がコマ割りを教えられない。構成も教えられない。

いしかわ先生は、木崎さんは自分で育っていくタイプだろうから心配していないと、『漫画の時間』で書いているが、実際は育っていない。これは、いしかわ先生は自分の経験則で、ちょっと語っている。

いしかわ先生は編集者の言うことを聞かない。それでもマンガ家としてやれたのは、「マンガ読み」という自分の中の編集者がいたからだ。

木崎さんは、編集者の管理を拒んでいるのに、自分の中に編集者がいない。

それにマンガ家は編集者から管理されるだけではない。編集者を利用しなくてはいけない。取材でアポイントメントを取らなくてはいけないとき、出版社に所属する編集者ならアポを取りやすい。編集者もマンガのクオリティーが上がるなら、できるだけマンガ家に協力する。締め切り

に間に合わせる以外は、編集者もマンガ家にムリをさせないし、マンガ家もムリは言わないが編集に支援してもらう関係だ。

だけど、これは理想の関係である。

そこは実際、力関係もある。

うまくいかないことのほうが多いだろう。

それと、木崎さんが長期連載できないことを奥村さんは、フラストレーションが溜まるからと思っているが、描く側からいわせてもらうと、モチベーションを保てない。その秘密は作画にある。



「少女ネム」より ゴロー
木崎ひろすけ

模写 五島千尋

今回、夏目房之介さんのマネをして、模写によって批評テーマを引き出そうとして、上の模写を一枚フリーハンドで描いてみたが、この絵柄は執着が無ければ描けない。

本人のことを知っているからか、私がズボラなのか、模写したときに、たまらないくらい集中しないと、この絵柄を描けないことに気付く。下書きを描かずに、テキトーに描いてるのに、たまらない気分になる。一本一本の線を集中して、描いてるのがわかるのだ。

こうした絵を描き続けるには、その絵を描くことに何か執着がなければ描けない。モチベーションを保てないと書いたのは、このためだ。

その執着は、何でもいいんだ。

ただ、木崎さんにはそれがなかつただけだと思う。

奥村さんがほれ込んだように、いしかわ先生も魅力的でオススメだと言っているように、やっぱり私もあの絵が好きだ。だが、その絵を描くためには、本当に集中力を磨耗してしまう。外側だけでなく、自分の内面にあるモノまで削ってしまうのだ。

だから、あの絵は、大切な宝物だ。

あんまりショーバイの事を考えずに、マンガのコマからカットを引いた画集、アートブックみたいのを追悼の意味も込めて、ちょっとひとつ作ってほしいな。とは思っていたが、単行本未収録作を収めた三冊しか出版されなかったことから、あまり商業的にも苦しかったことが見受けられる。

残念だ。

木崎さんは天国では、幸福にマンガを描いていてほしい。

それを私は願っている。

マンガレビュー 神経質な描線『少女ネム』木崎ひろすけ

<http://p.booklog.jp/book/87487>

著者：ゴトチヒ（文責・五島千尋）これを書かないとキンドル本に記事を流用する時、面倒。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotochihi1980/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87487>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87487>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

『少女ネム』 木訥ひろすけ
軒糸賢お苗縣

MANGA REVIEW

コミック

Free